

◎小学生の部

その他の良い作品

春風と足音

手子林小学校 六年

柿沼 思李沙

いつもの坂道を歩く
朝の風がやさしく吹いてきて
桜の花びらがひらひらとまい落ちる
足元に散った花びらを
そつとふまないように気をつけながら進む
まるで小さな春の贈り物みたいに感じて
遠くから他の子の笑い声が聞こえ
木の葉のざわめきも
いつもと変わらない景色の一部
空は淡い青色で
雲はゆっくり流れていく
あの頃と同じ空の下を
今日も歩いているんだと気づく

道は変わらないけど
この道を通るたびに少しだけ心が温かくなる
気がする
転んでひざをすりむいた場所も
友だちと秘密を話したかくれ道も
全部、私だけの宝物
だれかと話した帰り道の角も
夕日がさし込んでキラキラしてた
そんな何気ないしゅん間が
むねにそつと残っている
特別ではないけれど
ここが私の帰る場所
今日もこの道を歩いて帰る
この道を通るとき
いつも思い出すのは
小さな足音と笑い声
それが今も心の中で
やさしくひびいていること
この道は私の一部で
これからもずっと
変わらずここにあるんだろう

やさしい居場所

さとえ学園小学校 四年

柿沼 詩空

みんなでカレーを作ったり
流しそうめんをしたり
初めましての人たちと 初めての場所で
「いつでもだれでも来ていいんだよ」
そんなふうにおばさんが声をかけてくれた
緊張していた私は笑顔になった
私は料理を手伝ったりしたけれど
ずっと顔を上げずにしゃべらずスマホを触
っている中学生もいて
不思議そうに困ってみたい私に
「何してもいいんだよ肩の力をぬきな」
そんなふうにいってくれるおじさんもいて
言わないけれどいろんな事情の人がいて
存在を認め合ってできる範囲で助け合って
相手が嫌だと思うことは聞かない
やわらかいやさしい空気で
満たされている
ボランティアとして参加したのに
私の方が何だかホッとして

そこにいてだけでもいいんだよ
っていつてもらっている気がして
救われていた
こんな居場所がみんなに
羽生のいろんな場所にあるといい
クールシェアにも参加した
久しぶりの友達や初めての友達と
すぐに盛り上がる
地域の人の支援で
帰りにはお土産でうれしい悲鳴
私たちいろいろな人に助けられて
羽生で大きくなった
一人じゃない
そんなふうと思う夏だった
温かい気持ちも
そうでない気持ちも分け合える
他人だけれど他人だから
手を差しのべられることって
あるんだなあ

誰かのためのヘアドネーション

羽生南小学校 六年

梶原 愛咲

私は今
かみの毛を伸ばしている
ヘアドネーションをするために

ヘアドネーションとは
病気でかみの毛が抜けてしまった人の
かつらを作るために
長く伸ばしたかみの毛を切って
それを寄付することだ

私のお母さんもヘアドネーションを
やっていたので
私も保育園の時に初めて挑戦して
二回目は三年生の時
今回が三回目になる

伸ばしている途中は
洗うのも大変
かわかすのも時間がかかる

私は野球をやっているので
夏は暑い

大変なこと多いけど
私時間がかけて伸ばしたかみの毛が
大変な思いをしている
知らない誰かのためになるのなら
そんなうれしいことはない
これから誰かのためになる
何かを探していききたいと思う

小さく力強い光

須影小学校 四年

高野 優理奈

この虫はなんだろう。
ゴキブリにしている。
だけどちがう。
気味が悪い。
これがわたしとホタルの出会い。
わたしはかぞくと一緒に
ホタルを見に行った。
「ケースの中をのぞいてごらん。」と
ボランティアの人に言われてのぞいた。
黒い小さい虫がたくさんいるのを見て
おどろいた。
「これが本当にホタルなの。
写真とちがうよ。」
光っていないし、きれいじゃない。
わたしはボランティアの人に言った。
ボランティアの人は笑って言った。
「うん。はじめて見ると気持ち悪いよね。」
その通りだと思った。
昔はわたしが住んでいる家の近くでも

ホタルを夏見れたようだ。
しかし今はホタルを探しても見つからない。
一年に一度ホタルの里で見られるだけ。
わたしは気味が悪い虫を見に来たのか。
考えていくうちに空がだんだんくらくらなり
歩き始めると真つくらになった。
遠くのほうから
「見て。飛んでるよ。光っている。」と
声が聞こえた。
お客さんがいっぱいいて見えない。
早くわたしも見たいなと探していると
わたしも小さなやさしい光をみつけた。
もしかしてホタル。
一つ、二つ、三つと光がきえていった。
小さい光がわたしは明るく感じた。
ホタルは小さいけれどわたしはホタルから
元氣や幸せ、よろこびをもらった。
わたしも会う人を幸せにしたいと思った。

わたしの好きな事

羽生南小学校 五年

小林 虹花

わたしは書道が好きだ
真っ白な大きな紙に
太い筆でのびのびと書いていく
楽しい
スラスラと動く筆の後を
黒く光る線がすーっと追いかけてくる
気持ちいい
でも楽しいばかりじゃない
上手に書きたいのに
筆は変な方向へ行ってしまう
気づいた時にはもうおそい
また失敗だ
何度も練習して
何度も失敗する
そのくり返し
なんで上手にかけないんだろう
ポタ：
筆からすみのしずくが落ちる

真っ白い紙に黒い水玉ができた
ポタ：
わたしの目からなみだが落ちる
真っ白い紙にとう明の水玉がにじんでいく
くやしい
かなしい
上手に書きたい！
わたしは書道が好きだ
なかなか筆は思うように動いてはくれないけれど
思い通りの字が書けた時は満足感でいっぱい
だからわたしは今日も書道の練習をする
手も足も真っ黒になつて

五分間の通学路

羽生南小学校 五年

月岡 蒼翔

「行ってきます。」
ランドセルを背負ったら今日もはじまる五
分間の大ぼうけん

ピカッと光るカミキリムシ
ブンブン横切るハチの道
ガサガサカナヘビかくれんぼ
ジーツとカマキリにらめっこ

学校が近づくくと聞こえてくるよチヨロチヨ
ロ流れる水路の音。のぞきこんだら小魚
がスイスイ「今日もいるかな？」それも楽
しみ。見守り隊のおじさん、おばさんにな
っこりあいさつ。ぼくの朝がちよつとあた
たかくなる。

帰り道には友達のおばあちゃん。「とって
いいよ。」とキュウリ、ナス、ピーマン、イ
チゴに大葉のとれたて野菜。そしてセミの

ぬけがらをシャツにどんどんつけて虫のブ
ローチのできあがり。家に帰ると「また付
けて来たの。」とママはびっくり。

そんなぼくの大ぼうけんだけど月曜日はち
よつとちがう。

ぼくははん長、前を歩く。「車が来るよ、止
まってね。」みんなの命をちゃんと守る。ワ
クワクシながらも目はしっかり。

たった五分の通学路。時間もきよりもすぐ
終わるけどふるさとの道はぼくにとっては
大ぼうけん。明日はどんな出会いがあるか
ぼくは五分間はまだまだだつづく。

私の半紙はスケートリンク

手子林小学校 三年

中野 怜

手がうまく動かない
それでも書く
どこがいけないんだろう？
考えながら何まいも何まいも書く
そうしているうちにうまくなる

きれいな字は見やすいし読みやすい
気持ちやいっしょうけんめいさも
相手につたわると思う
今より字がもつともつとうまくなりたいたいから
大人になってもつづけたいたい

せ中をピンとのばして
しんこきゆうをする
ふでにすみをたっぷりつけて
チョンチョンと整える
お手本を見て
ここだと決める
トン、スウ、トン
よし いいかんじ
二画面も気をぬかないで
トン、スウ、クイ、トン

ふでがするする半紙の上をすべる
ファイギュアスケートみたいにする
自分がふでになったみたいにする
半紙の上を自由に大きく動いて
いい気持ち

でもつかれているときは
ふでが重い

おかえり

羽生東小学校 五年

西野 晴翔

「帰ってきたー」

お兄ちゃんのさけび声が聞こえた

台所に行くとお兄ちゃんはまどを指差し

ていた

台所のまどに ヤモリがはり付いていた

「おかえり」

と言っていた

三年前まで うちの台所のまどにはヤモリ

がいた

お兄ちゃんがチビと名前をつけて まどの

外で一緒に夕ごはんを食べていたヤモリ

「三年ぶりだね」

「チビの子どもかな？」

とお父さんも話していた

ヤモリはあいさつが終わったかのようにま

どから走っていなくなってしまった

もう少し見たかったな

八月になり 家族でお母さんの実家に帰省

をした

家に帰ってまどを開けようとすると あの

ヤモリがまどで待っていた

「おかえり」

と言われたようだった

「ただいま」

とぼくは自然に言っていた

昔から一緒にいた気持ち

今日もわが家の台所のまどにはお客さんが

いる

セルフサービスですが いつでもどうぞ

来年は家族で食事にきてね！

その時は「おかえり」と言うからね！

しあわせはこぶミニトマト

羽生東小学校 二年

長谷川 あお大

ぼくのミニトマトはきいろ
お日さまいっぱいあびてキラキラだ
「これはぼくのいちばん。」

いもうとのミニトマトは赤いろ
まっ赤にそだってピカピカだ
「これがわたしのいちばん。」

すっぱいかな？あまいかな？
たべてみたらぷちんとはじけて
ぼくもいもうともにつっこにこ

ぼくのきいろいミニトマト
ちよっぴりすっぱいけどみんなを
げんきにしてくれるあじ

いもうとの赤いミニトマト
あまくてみんなを
しあわせにしてくれるあじ

どっちもだいすき みんなだいすき
きょうもおさらの上でおいかけっこ
いろがちがっても なかよし
あじがちがっても みたいだな
ぼくといもうとみたいだな

なつまつり

羽生北小学校 一年

深町 悠希

わあっ ひとが いっぱい
びっくりしたあ
おおきな おみこしが
ぼくのほうに やつてきた
おみこしのうえに ひとがのっている
びっくりしたあ
わっしよ わっしよ
びっしりのひとたちが おもたそう
わっしよ わっしよ
パイッ パイッ パイッ
わっしよ わっしよ
パイッ パイッ パイッ
ぼくは おみこしといっしよに
ふえをふいた
りようてをとりのようにひろげて
いっしよにあるいた
あれっ そらがくらくらなっている
トントントントント
おおきなだしが やつてきた

あっ ともだちがのっている
いっしよ うけんめい てをふった
ともだちも てをふつてくれた
ともだちが たいこをたたきはじめた
トントントントントントント
ぼくは わたあめと
ひかるリングをふった
つぎのあさはやく
くるまでまちをとおった
あれえ
ふえをかったみせはどこ
たくさんのおみこしがいたのはどこ
たのしかったな なつまつり
らいねんもいくよ

ワクワクする羽生の音

手子林小学校 五年

福澤 颯人

楽器の音と同時に
「カッカッカ」と
音がかさなって
おもしろい
この羽生祭りには色々な音がある
ぜひ機会があったらこの詩^{うた}を思い出して
音を感じてほしい

あの日の夜の町

ぼくは、感じたお祭りの人の大勢の中に

小さくなったり、大きくなったりする音を

「ピーヒャラリラ」

「バーン」

「バンバン」

色々な音色が組み合わさった

まるで花火かのように

でもそれだけじゃない

後ろからもまたちがう音色が組み合わさる

人が会話をしているようだった

忘れられない思い出

みこしをかつぐ人の声みんなでそろえて

「エッサーホイサー」

リズムをとる声

まるで音楽合唱のように

次に新しい発見があった

それは人の歩く音だ

私の役割

羽生北小学校 五年

古谷 彩結

私のポジションは、セッターだ。セッターの役割は、「攻げきに直接つながるトスをあげる」ことだ。セッターは「コート上での司令とう」ともよばれている。レシーバーはセッターのいる位置にレシーブを返す。しかし、セッターの定位置にいつもきれいにレシーブが上がるわけではない。どんな返球であってもレシーブされたボールの下に素早く入り、安定したトスにセッターはつなげなくてはならない。レシーブされたボールが、どこに上がろうとも、私は走りボールの下に入る。コート内をあちこり走り回る。相手のブロツカーの位置を確認。スパイカーの位置を確認。

この二つを一しゅんで見て、誰にトスを上げればいいのか判断する。一しゅん一しゅんで最適なトスを上げる。スパイカーが打ち、相手コートにボールがつき刺さる。みんなでないだ一点みんなで共に喜ぶ。一点取ると、もう一点ほしくなる。一点一点の積み上げが勝ちにつながる。レシーブされたボールをアタツカーにつなぐのは私の役割。私は、今日もコート内を走り回りアタツカーに最高のトスを上げる。